



安養寺古墳群—新開1号墳を中心に—



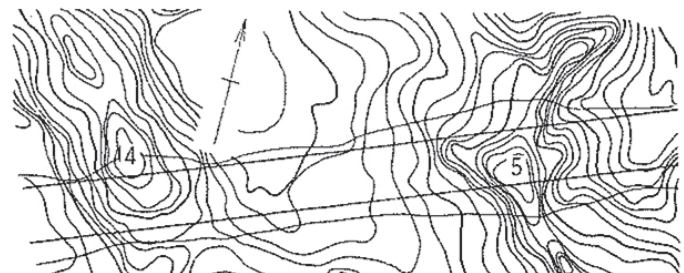
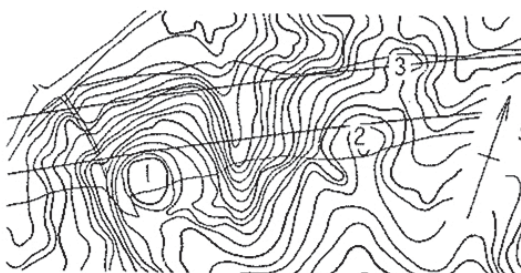
安養寺古墳群位置図

- 1. 下味古墳 2. 新開古墳群 3. 山寺屋敷古墳
- 4. 山之上古墳 5. 毛刈古墳 6. 佐世川古墳

栗東町は、^{こんぜ}金勝・^{はるた}治田・^{はやま}葉山・^{たいほう}大宝の4カ村が合併して昭和29年に発足した町です。このうち、治田・葉山・大宝の各村に属していた、JR琵琶湖線・草津線、国道1号線、8号線に沿った地域は都市化の著しい地域ですが、以前は水田の連なる農村地帯でした。この平野は、現在の守山市・中主町の全域と、草津市・野洲町の平野部と共に湖南の穀倉地帯を造っていたのです。この平野が丘陵地帯に移行するところ、野洲川を挟んで栗東町の安養寺山と野洲町の三上山があります。三上山は古代以来信仰の山として仰がれており、現在も麓の三上神社に神体山としての信仰の姿を残しています。安養寺山については、山その

ものを祭る姿は見られませんが、^{かわづら}川辺・安養寺・小野・六地蔵・林・伊勢落と、新旧の古墳が安養寺山とそれに続く丘陵の山腹から山麓にかけて連なっています。

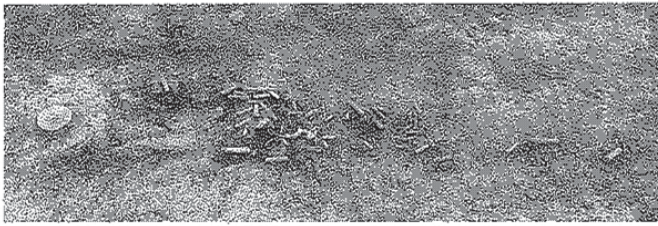
昭和30年代になって名神高速道路建設の議がすすみ、安養寺山麓がそのルートとして計画されました。当時この付近では、岡の地山古墳、川辺の^{はいづかやま}灰塚山古墳、安養寺の^{おおつかごし}大塚越古墳・^{つばきやま}椿山古墳などが知られていましたが、同道路の安養寺山麓ルートには古墳の存在が聞かれませんでした。たまたま、明治初年に開墾されたと伝えられていた^{しんがい}新開地域で、用地買収のため樹木の伐採が行なわれたところ、埴輪の破片が発見されました。そのため、取りあえずその個所を調査することになり、昭和34年8月に発掘調査が行なわれました。その結果、此处は多くの副葬品を持った古墳時代中期の古墳であることが判明したのです。このあたりの山林中には、尾根上に新開（これを新開1号墳と名付けました）と同じような地形の場所があり、中には松茸山の客のための広場としている所もありました。念のためこれらの場所に調査の鍬を入れた結果、新開1号墳のほかに、川辺の^{したみ}下味古墳、安養寺の新開2号墳、山寺屋敷古墳、山之上古墳、



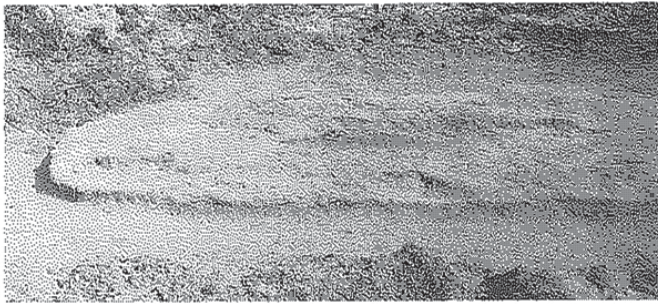
名神高速道路設計図より

- 1. 下味古墳 2. 新開1号墳 3. 新開2号墳 4. 山之上古墳 5. 毛刈古墳

もっかり
毛刈古墳、小野の佐世川古墳と、古墳が並んでいることがわかったのです。しかし、古墳の埋葬施設である主体部が完全に残っていたのは、新開1号墳と、松茸山の客のための小さな家が建っていた下味古墳だけで、佐世川古墳は後世の攪乱で主体部が一部崩れており、新開2号墳、山之上古墳・毛刈古墳は、古墳築造後の千数百年に及ぶ土砂の流出で、主体部を覆っていた封土や、主体部の上部・左右



毛刈古墳遺物出土状況



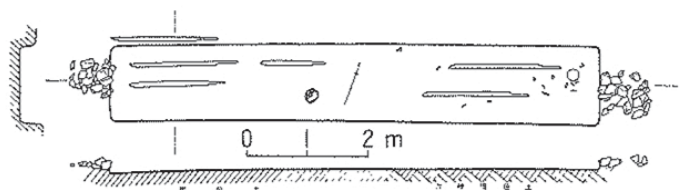
毛刈古墳粘土床（串は鏡の位置を示す）

等はすべて無くなっており、辛うじて残った主体部の底の一部に遺物が残存していました。即ち、調査してみると、地表から10数cmから20cm余りで古墳の主体部の底が現われたのです。山寺屋敷に至っては、僅かに底の粘土の一部が見つかり、此処にも古墳があったのだろうと推定されただけでした。もう少し土砂の崩壊が進むか、松茸山の客のための広場造成工事が深かったら、これらの古墳も早くに無くなっていたのです。

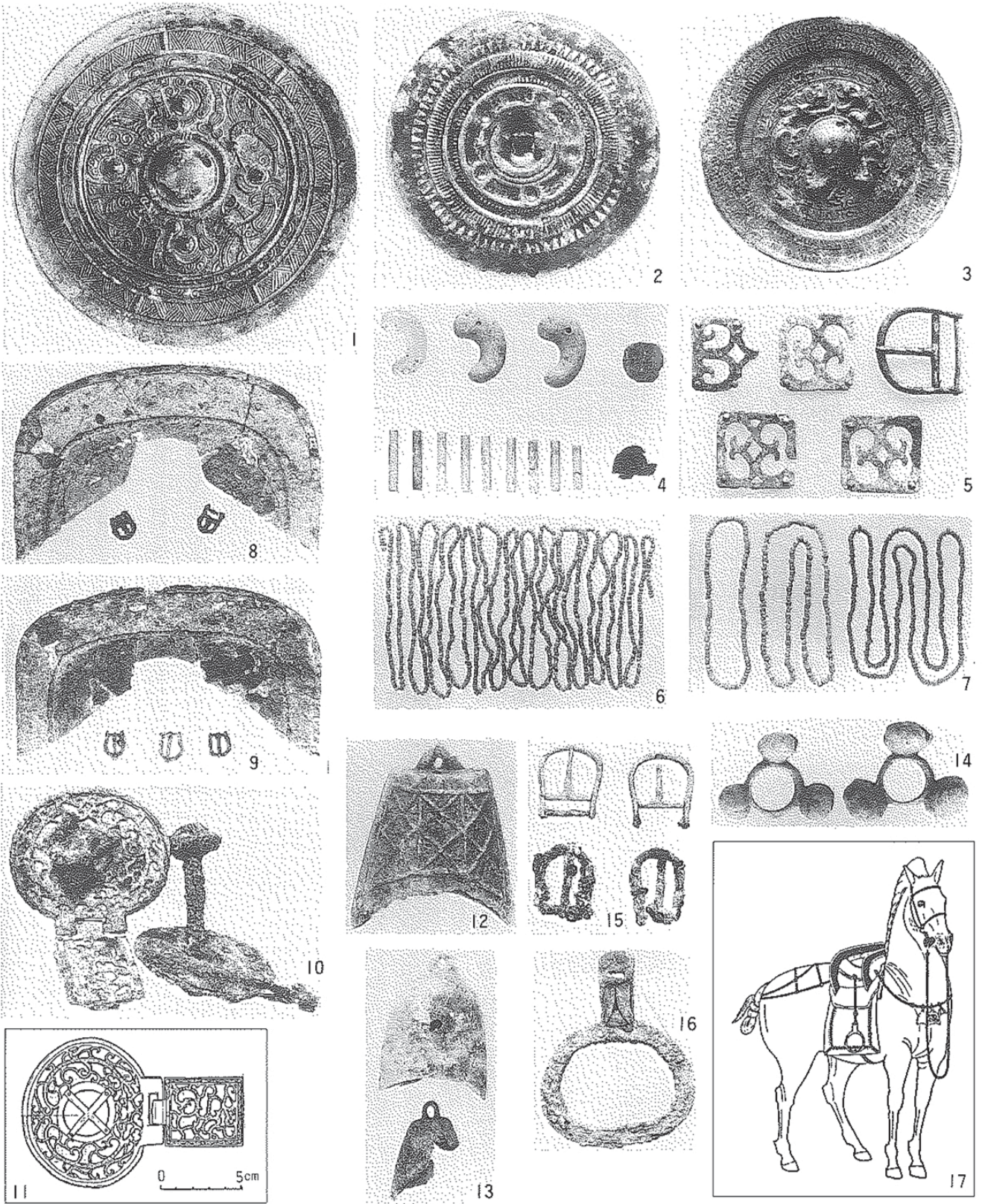
これらの諸古墳の出土品のうち、新開1号墳の出土品は、前述のように古墳時代中期の重要な副葬品の数々を含んでおり、昭和62年考古資料として国の重要文化財の指定を受けました。以下に、これらの出土品について説明をして、読者の方々の参考に供したいと思います。

安養寺山から派生して麓の安養寺の町の方へ延びる尾根上に、直径30m程の円墳が造られていたようです。前述のように古墳であるとは露知らず行なわれた開墾作業で、墳丘の姿はある程度変形したでしょうが、この作業は主体部までには至らなかったもので、古墳の主体部は埋葬当時のままで残りました。此の円墳の中央に、尾根の方向を古墳の軸としてそれに対し直角に、長さ3m95cm、幅60cmの木棺と、長さ4m90cm、幅60cmの木棺が並行して埋葬されていました。所謂木棺直葬の形式で、木棺を被覆する施設は何もありませんでした。木棺そのものは2棺とも無くなっていて、その痕跡も認められませんが、埋納された副葬品の出土状況から棺の大きさはほぼ正確に推測されました。なお、北のやや短い方の棺は両端を小礫で押さえていました。南北両棺の実測図によって、以下の説明を理解していただきたいと思います。

北棺では、東端近くに納置された鏡と中央にあった鏡の間がほゞ2mあり、東端の鏡のあたりに玉類が多く散乱していたので、この間に東を頭にして人体が埋葬されていたと思われる。東端の鏡は五獣鏡で、その傍に櫛が1個あり、それから西へ鉄刀2本が約20cmの間隔で平行して置いてありました。中央の足許と思われる位置に、盤龍鏡が1面あり、これは木箱に入れてあったらしく、木片が一部に付着していました。玉類は木棺の東の部分に多く散乱しており、碧玉製勾玉2、瑪瑙製勾玉1、碧玉製管玉22、ガラス製小玉が約400、滑石製小玉が約300発見されました。一部の小玉は棺外で発見されましたが、これは棺内から排除された土を篩にかけて発見したもので、本来棺内にあったものとみるべきで

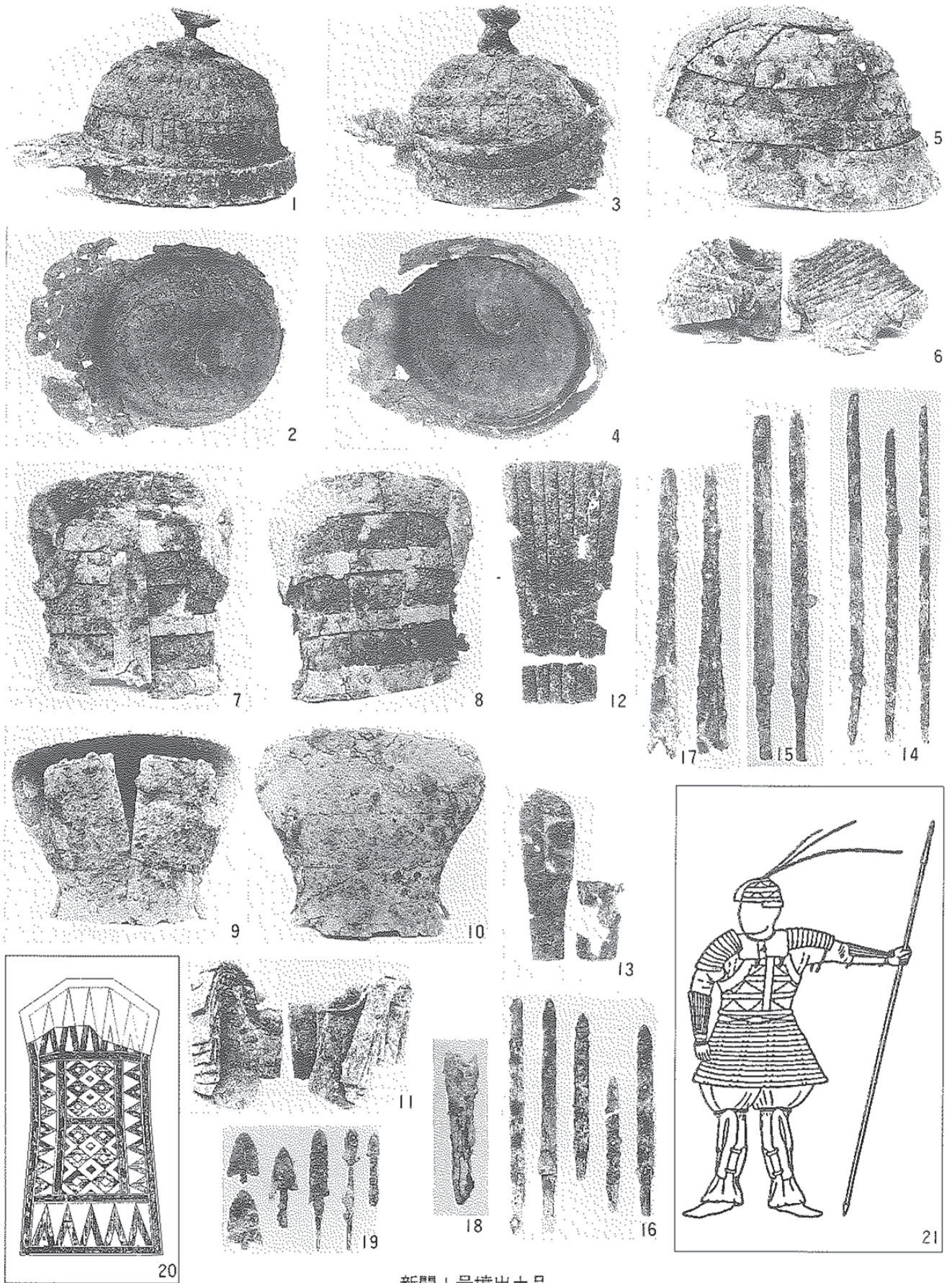


新開1号墳 北棺実測図



新開1号墳出土品

1. 画像鏡 2. 五獸鏡 3. 盤龍鏡 4. 勾玉・管玉・櫛・有孔円板 5. 銚板・鉸具
 6. 小玉(南棺) 7. 小玉(北棺) 8. 鞍前輪 9. 鞍後輪 10. 轡 11. 同実測図
 12. 13. 馬鐸 14. 環鈴 15. 馬具鉸具 16. 輪鐙 17. 馬具装着図



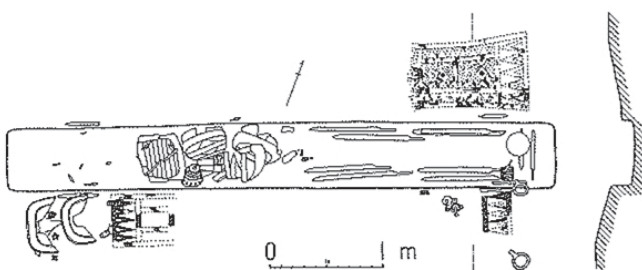
新開1号墳出土品

- 1、2. 眉庇付冑 3、4. 同前 5. 衝角付冑 6. 肩鎧
 7、8. 短甲 9、10. 同前 11. 肩鎧、頸鎧 12. 籠手 13. 臑当 14. 鉄刀 15. 鉄劍
 16. 同前 17. 鉄矛 18. 石突 19. 鉄鋌 20. 盾実測図 21. 武具装着図

す。中央の鏡から棺の西端までの間には、鏡と並べてやや短い鉄剣が、その西には刀剣各1がありました。棺外では鉄刀が1本と、西端の詰石の間から有孔円板が1個発見されただけです。(実測図の刃先が \curvearrowright となっているのは鉄剣で、 \curvearrowleft となっているのは鉄刀です)

南棺では多くの副葬品が発見されました。まず棺内から説明しましょう。東端に比較的短い鉄剣2本と画像鏡1面があり、その傍に鉄鏃が50本一括して納めてありました。その西に約1m80cm程の空間があり、空間の北壁に沿って鉄刀と鉄剣が対になって2組計4本が、南壁の下にも鉄刀と鉄剣、鉄刀と鉄刀の4本がありました。恐らくこの空間に人体が埋葬されていたと思われます。その西端には金銅製(金メッキを施した銅製品)の鍔板(ベルトの装飾品)4枚と鉸具(ベルトの留金具)1個や滑石製小玉1860、櫛1がありました。その西の区画には、約1.5m程に甲冑その他の武具が納めてありました。鎧はすべて短甲(前胴と後胴で肩から腰までを擁護するための鎧)で、4領あり、冑は衝角付冑(先の尖った冑)1と眉庇付冑(前面に庇の着いた冑)4がありました。そのほか、肩鎧や頸鎧・籠手・臙当など一式の武具があり、鉄剣や鉄鏃・刀子(小刀)なども少量出土しました。それより西の区画は遺物が少なく、鉄鏃や工具類が数点発見されただけでした。しかし、始めからこれだけだったのではなく、腐敗消滅する性質のもの、例えば布製品や木製品などがあったのかもしれませんが。

棺外では三方で盾が検出されました。棺の



新開1号墳南棺実測図

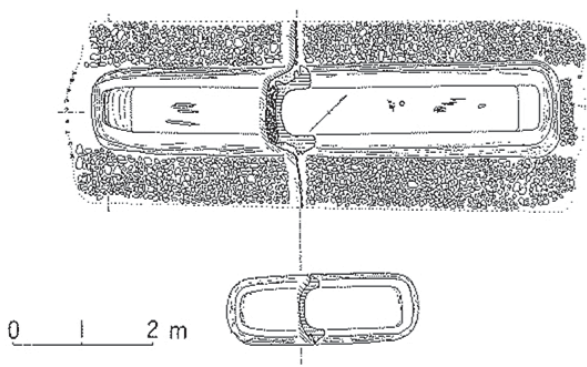
北西側にもあったのかもしれませんが、検出はできませんでした。盾の本体はすべて無くなっており、その表面の刺繍のあとを留めた漆の薄膜だけが残っていたのです。したがって、土の間に残った漆の薄膜を検出し、それにしるされた刺繍の痕跡によって文様を知るのです。大きさは復原すると長さ1.3m、最大幅0.6mほどと思われます。実物は漆の膜を検出した後、石膏を流してそれに付着させて取り上げました。(現在ではもっと優れた方法があります)したがって、写真を示してもはっきりしませんので、報告書の実測図を転載しました。木棺の南側には、盾に重ねるように馬具類が2ヵ所に分けて並べてありました。東側には透彫を施した素晴らしい金銅製の鏡板付の轡や輪鎧・環鈴・辻金具・鉸具などが、西には、鞍の前輪や後輪・馬鐸その他辻金具や鉸具などがありました。そのほか、矛などの武器も置かれていました。

以上の副葬品の一部は「安土城考古博物館常設展示解説」の中に図示されている武人と馬のイラストによって、実際どのように装着したのかを示すことにします。なお、これらの品々のうち、鉄製品は錆が進むと原形を損ないますので、科学的な保存処理によって復原保存しております。現在安土城考古博物館に陳列されているものは、このような保存処理を施したものです。なお、甲冑のそれぞれ一つに就いて、処理前の写真と処理後の写真を並べて示しました。

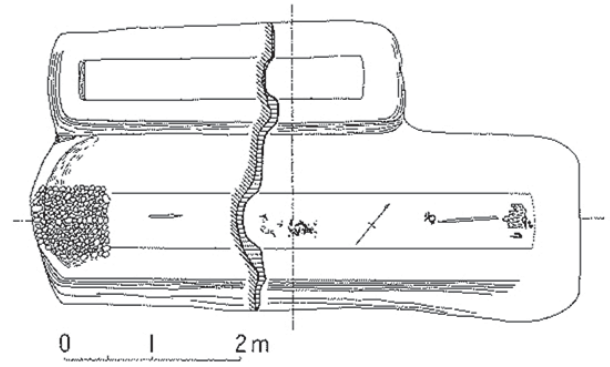
下味古墳は川辺にありますが、安養寺古墳群の中の一古墳とみるべきでしょう。この古墳で注目すべきことは、ほぼ平行に並んだ二つの粘土槨(粘土で棺を被覆した埋葬施設)に、それぞれ副槨とでもよぶべき構造物が付設されていることです。その様子を報告書所載の実測図によって示しましょう。副葬品は副槨からは発見されませんでした。また、二つの粘土槨の副葬品は、鏡、玉類、鉄製の刀剣や工具類等で、新開1号墳のような武具や

馬具はありませんでした。

(西田 弘 氏提供)



下味古墳南東粘土槲実測図



下味古墳北西粘土槲実測図

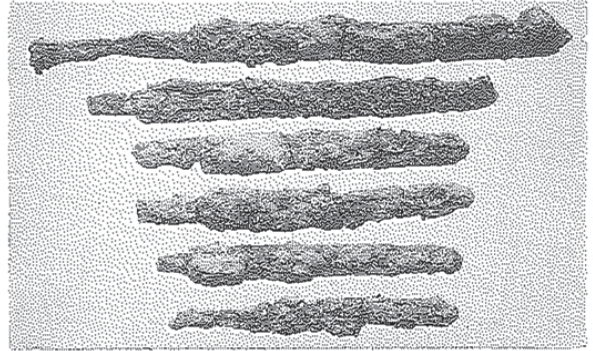
古墳の破壊が僅かに及ばず、辛うじて残った遺物



鉄錠 (新開 2 号墳出土品)



二神二獣鏡



(山之上古墳出土品)

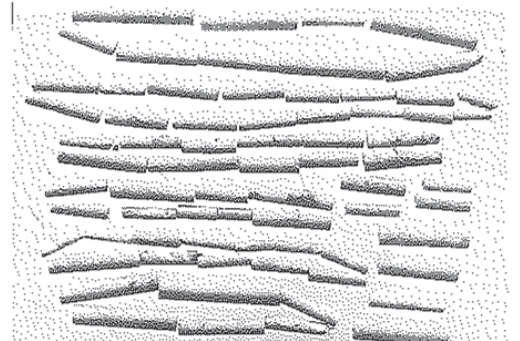
鉄剣

新開 2 号墳出土鉄錠の説明

鉄錠は鉄製品の素材として朝鮮半島から輸入されたものと思われま^す。古墳の副装品として出土した例が数例わが国でも知られています。



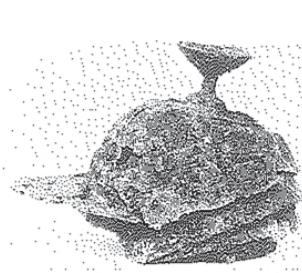
変形文鏡



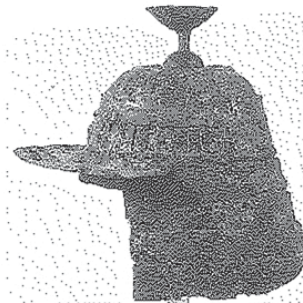
(毛刈古墳出土品)

管玉

甲冑の保存処理前後の一例



処理前



処理後



処理前



処理後